

軍事史学

第57巻 第3号

巻頭言

軍隊とスポーツ——繋がる歴史——

高嶋 航

史料を読んでいると、思わぬところで人やモノが繋がることがある。それは、たんに個々の人やモノが結びつくというよりは、その人やモノの背後にあるネットワークが接続されることを意味する。この接続が意外であればあるほど、そこから導き出される解釈や理解は意義が大きい。その人やモノに対する見方が一八〇度転換することもあるだろう。それが歴史学の醍醐味の一つだと私は考えている。

軍隊とスポーツもそういう意外な取り合わせに入るのかもしれない。私はここ数年満洲のスポーツに関する史料を読み続けている。つい先日、黒田源次という人物が気になって調べてみた。黒田は満洲でスキーの紹介・普及に尽力し、当時は満洲医科大学教授、戦後には奈良国立博物館の初代館長も務めている。京都帝大で心理学を学んだが、東洋史に関する著述も多い。私も京大で東洋史を研究しているという個人的な関心から興味を持った。黒田の父は有馬源内、西南戦争を薩軍側で戦い、自由民権運動の志士となり、初代熊本市会議長を務めた。有馬源内の長男で、黒田源次の兄にあたるのが有馬成甫である。有馬成甫は軍事史家で、軍事史学会の創設に関わった人物であるから、私の研究テーマと軍事史学会は無関係ではないことになる。

軍隊とスポーツ、とりわけ旧日本軍とスポーツの取り合わせは、私にとっては意外であった。だからこそ研究を始めたのだが、当時の日本人にとっても、また現在の（日本以外の）人々にとっても、軍隊とスポーツの関係はさほど意外なものではないことがわかってきた。G・オーウェルはスポーツを「射撃（the shooting）のない戦争」と形容したが、その射撃さえオリンピックの実施競技に含まれているのだ。軍人だけのワールドカップやオリンピックすらある。サッカーの軍人ワールドカップは一九四六年に始まり（二〇〇一年からは女子も加わった）、一九九五年からはミリタリーワールドゲームズが行われている。後者は二〇一九年に武漢で開かれ、このときアメリカ軍がコロナウイルスを武漢に持ち込んだと中国側が主張したことで有名（？）になった。日本でも自衛隊とオリンピックには様々な点で深い繋がりがあがる。

残念ながら、日本では軍隊とスポーツを論じる研究はまだ少ない。両者を結びつけることで、軍事研究とスポーツ研究にどのような新しい視点や解釈をもたらすことができるのか、その答えは今後の研究を待たねばならない。今回の軍事史学会年次大会がその出発点となることを願ってやまない。

（京都大学）